

主日の福音 2025/8/15(No.1369)

聖母マリアの被昇天 (ルカ 1:39-56)

苦勞をいとわず、人を愛し、神をたたえた



聖母マリアの被昇天の祭日を迎えました。小さなことですが、去年まで「聖母の被昇天」と呼んでいたように思いますが今年の典礼暦を見ると「聖母マリアの」とわざわざ書いてあることに目が留まりまして、今年から何かしら変更があったのか、それとも昔から「聖母マリアの被昇天」だったのを気付かずにいたのか。知りたいところです。

さて福音朗読はマリアがエリサベトを訪ねる場面です。エリサベトが住んだのは「エン・カレム」という町だったとされていますが、マリア様の住むナザレからエン・カレムまで、何キロあったと思いますか。車が走る現代のルートを辿っても、およそ 150km 離れている町です。

福江島の中で 150km 離れた場所を探すことはできません。福江港から長崎の大波止まで約 100km です。それでも足りません。長崎駅から 150km となると、博多駅が似たような距離になります。それを仮に、ろばに乗せてもらって旅をしたとしても、150km 離れた場所はどう簡単でなかったことは容易に想像できます。それでもマリア様は、身重のエリサベトを訪ねて行くことをためらいませんでした。

私たちは、「親戚の家に果物を届けてきて」と言われて、もし親戚の家が 150km 離れていたなら「分かった」とすぐ返事ができるでしょうか。もし自転車のような乗り物しかない時代だったら、本当にお使いを引き受けるでしょうか。私だったら、郵便局に行って果物を送るかもしれません。

しかしマリア様は、苦勞を決していといませんでした。150km 離れたエリサベトに挨拶して、姉妹のように心を通わせたのです。苦勞を苦勞と思わず、エリサベトを助けてあげたい、その一心で訪ねていきました。天に上げられた聖母マリアは、苦勞を決していとわらない方であり、苦勞を苦勞と思わない方であった。そう言えるかもしれません。

今日はこの一点を、皆様と分かち合いたくて説教を考えました。中田神父もたまに、井持浦教会や浜脇教会のミサに行きますが、井持浦教会まで片道 31km、これを 150km に置き換えると、あらかじめ二往復してから教会に出発してようやく 150km です。浜脇教会までは片道 13km ですから言わずもがなです。苦勞を決していとわずに、150km 離れた教会にミサに行けるだろうか。マリア様のお手本を前にすれば、司祭が七人もいて、それぞれに努力していると言っても全然足りないのかなと考えました。

今回も、小教区統合の話をしたいのですが、離れた兄弟姉妹が、苦勞をいとわず、苦勞を苦勞と思わず交流するなら、私たちは今日の聖母マリアの被昇天にとってもふさわしいあずかりかたをしていることになると思います。マリア様がエリサベトに挨拶に行く間の困難を思えば、私たち福江小教区と浜脇小教区が一つの家族となって神さまをたたえることは、困難があってもすばらしい価値ある働きではないでしょうか。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」（1・46）危険と隣り合わせの旅を、何日もかけてやってきた聖母マリアの口から出たことばは主をあがめ、神を喜びたたえることでした。私たちにも小教区統合が近づいていまして、それは協議会を何回も重ねて積み上げた結果であり、もしかしたら危険と隣り合わせの結果かも知れません。

それでも私たちの第一声が、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」でありますように。苦勞を乗り越えた先で、「今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう」（1・48）となることを願っています。神が、目をかけてくださったことは、どんなに困難なことでも、実現するに違いありません。

年間第 20 主日(ルカ 12:49-53)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。